

全国都市緑化フェアがもたらすレガシーとその持続性について

正会員 ○中村 優里*
同上 川原 晋**
同上 片桐 由希子***

緑化フェア 組織運営
イベントレガシー 地域振興
持続性 観光

1. はじめに

1.1. 研究背景

全国都市緑化フェア（以下、緑化フェアと呼ぶ）は、緑豊かな都市づくりに寄与すること目的として開催されている国土交通省の施策である。1983年から原則として毎年度、都市公園又は都市公園の設置が予定されている場所を会場として、開催地の地方公共団体と都市緑化機構の主催で開催されている（国土交通省 2011）。当イベントは、都市緑化の普及を目指している一方で、毎年異なる地域で開催される持ち回り方式による単年度開催のため、開催地における緑化フェアの長期的な効果が疑問視されている¹。

また、近年イベントの開催意義としてレガシーに焦点が当てられている。例えば、IOCはオリンピック開催を契機として社会に生み出される特にポジティブな影響をオリンピックレガシーと定義している。レガシーの捉え方に幅はあるが、阿部（2013）は国民体育大会の意義、田代（2012）は文化イベントの役割をレガシーに注目することで言及している。そこで本研究では、これらのイベントレガシーの研究において検討されてきたレガシーの内容やその生まれ方の経緯を踏まえて、まちづくりや地域マネジメントにおける仕組みづくりの契機としての緑化フェアの役割に注目する。

1.2. 研究目的

本研究では、（1）緑化フェアを契機として生み出されるレガシーは何か、また（2）緑化フェアのレガシーの形成プロセスと継続の要因について明らかにすることを目的とする。なお、本研究では「緑化フェアレガシー」を緑化フェアを契機に地域に及ぼす単年度で終わらない良い影響と定義し、緑化フェアレガシーの継続とは、数年にわたりレガシーが残っていくことと捉える。

1.3. 仮説と研究方法

既往文献調査をもとに本研究では、緑化フェアレガシーが形成される要因について、「緑化フェア開催後を見据えてコンテンツを計画し、地域の資源を生かす工夫や地域の課題を解決するための工夫として緑化フェアを活用

しているから」と仮説を立てた。逆に、緑化フェアのためだけに計画したコンテンツは緑化フェアレガシーとして残らないのではないかと考えた。また、継続の要因、すなわち緑化フェアレガシーがより長期的な効果をもたらすための要因について、「緑化フェア開催から数年経った後に、改めて継続のための何らかの工夫がなされたから」と仮説を立てた（図1）。

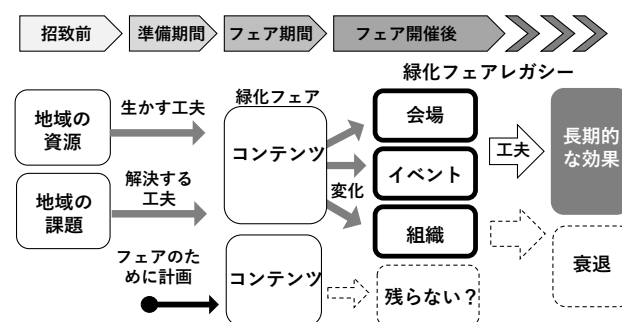


図1 緑化フェアレガシー形成プロセスの仮説

これらの仮説を検証するための研究方法を以下に記す。第一に、主催団体の都市緑化機構へのヒアリング調査と文献調査から緑化フェアの特徴を整理する。

第二に、既往研究からイベントレガシーの項目を明らかにし、緑化フェアレガシーの調査項目を作成する。

第三に、過去に緑化フェアを開催した6地域の担当者へのヒアリング調査から、具体的な緑化フェアレガシーとその形成のプロセスを明らかにする。

第四に、緑化フェアレガシーの継続の要因を明らかにするために、調査結果の考察をする。

2. 全国都市緑化フェアの特徴

2.1. 開催目的と事業内容

緑化フェアは、都市緑化意識の高揚、都市緑化に関する知識の普及等を図ることにより、国、地方公共団体及び民間の協力による都市緑化を全国的に推進し、緑豊かな潤いのある都市づくりに寄与することを目的としている。

また、メイン会場を緑や花で彩ることで開催地域のみ

ならず広範囲の地域から多くの来場客を招くことで、都市緑化意識の啓発や情報発信だけでなく、開催地域の魅力を発信することによる観光振興、個人消費による経済的な波及効果も期待できるとされる。

2.2. 関連組織との関わりと事業費確保の工夫

都市緑化機構へのヒアリングから、以下の特徴があることがわかった。まず、緑化フェアは招致が決定してから3～4年の準備期間があり、その準備期間中に実行委員会を設立し、過去の開催地域の視察や、都市緑化機構による助言・工夫が行われ、関連組織との連携体制が構築されている。次に、緑化フェアの事業費は、その支出項目についての制約があるため、特に都市公園以外のオープンスペースに対する設備への投資などについては、各自治体で財源の確保方法を工夫している。

3. 緑化フェアレガシーの項目の設定

3.1. 設定手順

はじめに、イベントレガシーに関する既往研究の文献調査を行い、イベントレガシーの項目を整理した。その項目と緑化フェアとの比較を行い、緑化フェアレガシーとして考えられる項目を抽出した。

3.2. イベントレガシーの項目

メガイベントと地域イベントのレガシーに関する既往研究から、レガシーに関する項目について整理した(表1左側)。

施設やインフラなどのハード面では、競技場やスポーツ施設、文化施設などの「会場」、交通インフラや住宅供給、観光複合施設などの「都市環境」、生物多様性などの「環境」がイベントレガシーとして評価されていた。

政策や組織などのソフト面では、大きくイベントの関連分野に関するレガシーと社会への波及効果をもたらすレガシーの二つに分類できる。関連分野に関するレガシーとして、「組織」や「イベントの継承」、体験・記憶の共有などの「知識・意識」、プロ活動の支援・育成や教育などの「政策・制度」、ボランティア活動などの「市民活動」がイベントレガシーとして評価されていた。社会への波及効果をもたらすレガシーとして、観光客の増加や人材育成などの「地域振興」、教育レベルの向上や地域に対する誇りの醸成などの「社会発展」、都市・国家イメージの形成などの「情報発信」がイベントレガシーとして評価されていた。

3.3. 緑化フェアレガシーとして考えられる項目の検討

緑化フェアレガシーとして生み出される項目を検討する。そのため、3.2で整理したイベントレガシーの項目をもとに緑化フェアの公式記録や緑の基本計画など関連事業から緑化フェアレガシーとして考えられる項目を抽出

した(表1右側)。

現在も緑化フェアレガシーとして存在していることを資料から把握できたものは、ハード面での会場やインフラ整備や街の美化を含む都市環境整備の一部、ソフト面での緑化フェア関連イベントやガーデンコンテストのような表彰といった事業のみであった。イベントを支える組織や人的ネットワークなどを含むその他のソフト面でのレガシーについては断片的な抽出、もしくは推測に止まった。そこで、本研究では「会場」「イベント」「組織」「政策・制度」「市民活動」「地域振興」の6項目に着目し、緑化フェアレガシーを調査することとした。

表1 本研究で着目する緑化フェアレガシーの項目

イベントレガシーの項目		緑化フェア公式記録	緑の基本計画など		
ハード	会場	競技場やスポーツ施設、文化施設	都市公園、関連施設、街中会場		
	都市環境	交通インフラ・システム、公共施設へのアクセシビリティ	駅、駐車場、バス輸送システム等の項目	都市公園、関連施設、街中会場	
		住宅供給	なし	なし	
		観光滞在施設(ホテル・インフォメーションセンター等)	公園館の設立	なし	
		街の美化・景観	沿道花壇の整備、街中緑化活動	沿道花壇の整備、街中緑化活動	
その他技術(情報通信等)	なし	なし			
環境	水・空気の質、生物多様性、廃棄物処理など	環境宣言、美化宣言の環境意識に対する啓発運動	なし		
ソフト	関連分野	組織	運営組織	行政組織、関連民間団体	行政組織
		関連組織	行政組織、関連民間団体	民間団体	民間団体
		人的ネットワーク	官民学連携	なし	なし
	イベントの継承	イベント企画・運営技術	緑化関連イベントの開催、コンテスト等表彰事業	緑化関連イベントの開催、コンテスト等表彰事業	組織
		運営体制	緑化フェア推進室の設立	組織	組織
	知識・意識	体験・記憶の共有	なし	なし	なし
		知識の向上・文化としての浸透	緑化知識の向上、都市緑化の浸透	緑化知識の向上、都市緑化の浸透	緑化知識の向上、都市緑化の浸透
	政策・制度	プロ活動の支援・育成	造園家の支援、補助	なし	なし
		教育	小学生のガーデンへの参加	小学校への教育プログラム	小学校への教育プログラム
		政策	緑化政策の策定	緑化政策に基づき活動	緑化政策に基づき活動
市民活動	関連領域の活動促進	都市緑化活動の促進、花壇の制作、維持管理	都市緑化活動の促進、花壇の制作、維持管理	都市緑化活動の促進、花壇の制作、維持管理	
	ボランティア活動	花壇の手入れ、管理、清掃、警備	花壇の手入れ、管理、清掃、警備	花壇の手入れ、管理、清掃、警備	
	新規活動事業	花緑関連事業、講習会	講習会	講習会	
社会への波及効果	地域振興	観光客の増加	広域からの観光客あり	観光客あり	
		人材育成	ボランティアへの造園技術・ガイドツアーの指導	ボランティアへの造園技術・ガイドツアーの指導	
	社会発展	雇用機会の拡大	なし	なし	なし
		貧困・教育レベル向上、マイノリティーグループの参加	なし	なし	なし
情報発信	関連領域以外の社会的な課題に関する意識	なし	なし	なし	
	地域に対する誇り	緑、花のある地域に対する誇りの情勢	なし	なし	

4. 緑化フェアレガシーと形成プロセス

4.1. 調査対象地の選定

対象地は、外部からそのレガシーの存在を知ることのできた緑化フェア関連イベントがある地域を中心に、都市緑化機構で長年にわたり緑化フェアを担当してきたT氏から助言を受けた上で、当時の担当者に連絡が取れた6地域(相模原市、京都市、岡山市、寒河江市、奈良県、鳥取市)を対象とした。

4.2. 調査方法

「緑化フェアレガシー」の項目、詳細及びその継続・展開について、緑化フェア実施当時の行政担当者への半構造化インタビューにより明らかにした。

4.3. 調査結果

ここでは鳥取市の事例を取り上げる。

会場に関するレガシーとして、公園に設置されたナチュラルガーデンが挙げられる。ナチュラルガーデンが整備されたことにより、湖山池公園が広域観光 MAP に掲載されるといふ変化が起こった。また、緑化フェア中に、まちなか会場として設置されたナチュラルガーデンは、現在でも鳥取市内の公園や駅前に残っており、管理されていた。

イベントに関するレガシーとしては、既存イベントであったグリーンフェスタが緑化フェアでの盛り上がりきっかけに、会場を移したことで、来場者数が増加したことなどの変化が見られた。また、緑化フェアを契機に新しくシーズンウォークというイベントも開催されるようになった（図2）。

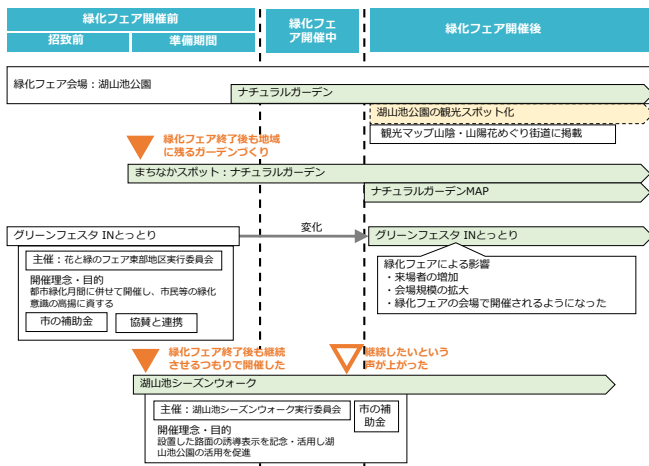


図2 鳥取市ヒアリングまとめ図1

一方、政策や制度については、ナチュラルガーデンマスターという資格制度を新たに設けている。これらは緑化フェアに向けて講座を開講し、受講者は緑化フェア中にはガイドとして活躍していた。緑化フェア終了後には、県組織や外郭団体に引き継がれ、今もなお事業として取り組まれている（図3）

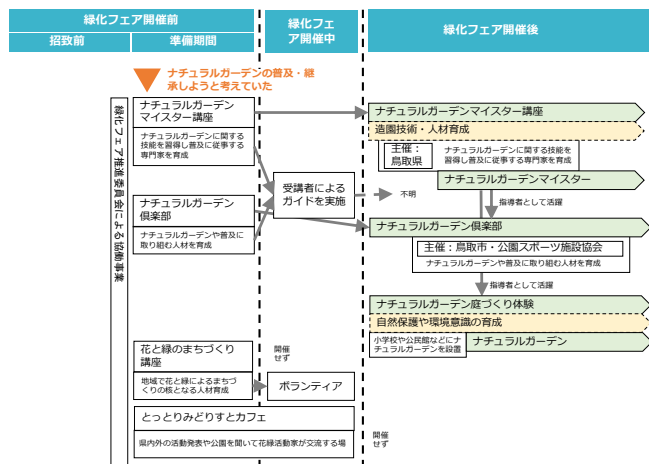


図3 鳥取市ヒアリングまとめ図2

4.4. 6地域における緑化フェアレガシーのまとめ

各地域におけるヒアリング調査から明らかになったレガシーを表2に整理した。それぞれの項目ごとの傾向を述べる。

まず、「会場」は開催年度に関係なく全地域に残っている。緑化フェア関連「イベント」は、相模原市以外の地域で継続して行われている²。「組織」は、緑化フェアを契機に創出されたもの、緑化フェアを契機に事業が増加したもの、という違いはあるもののどの地域でもレガシーとして存在している。「市民活動」や「地域振興」については10年以上経過してしまうと、地域に残りにくい。しかし、近年開催された岡山市、奈良県、鳥取市では「市民活動」や「地域振興」の促進を開催目的の一つとして位置付けていた。

表2 各地域の緑化フェアレガシー

	相模原市	京都市	寒河江市	岡山市	奈良県	鳥取市
年	1992	1994	2002	2009	2010	2013
開催目的	予定していた横浜市の開催を拒否したため、県からの声がかかったため	市で買収していた空き地を公園として整備するため	山形県での開催が決まったのち、既存の緑事業が評価されたため	公園の整備を行うため 公園の利活用に対する課題を解決するため	平成遷都1300年事業の会場を南側に作るため 公園の整備を終わらせるため 公園の知名度を上げるため	造園建設業協会からの開催を望む声があったため 一度招致しようとしたが、県からの反対があり失敗していたため
会場	相模原市立麻溝公園 神奈川県立相模原公園	梅小路公園 いのちの森	最上川ふるさと総合公園 (ハイウェイオアシス)	西大寺公園 体験学習施設(百花プラザ) 西創緑地公園	馬見丘陵公園	湖山池公園 まちなかナチュラルガーデン
イベント		梅小路公園フラワーフェスタ	花咲かフェア in 寒河江 →夢たネ寒河江 →さくらんぼの祭典	都市緑化推進フェア 百花草 花・緑ハーモニーフェスタ in 西川	フラワーフェスタ チュリップフェスタ 花鳥蒲祭り ひまわりウィーク クリスマスウィーク	グリーンフェスタ in とっとり 湖山池公園シーズンウォーク
政策・制度	みどりいっぱい運動(花の苗の配布) 公園整備	緑に関する制度の策定が本格化		西川バフォーマー事業	西川バフォーマー事業	ナチュラルガーデンマスター講座 ナチュラルガーデン倶楽部
組織		京都市公園協会の設立 京都産業大学のいのちの森モータリグチーム	さくらんぼ観光課	部局再編(庭園都市推進課) 岡山市公園協会	県営公園管理事務所	都市整備部都市環境課 公園スポーツ施設協会
活動・市民		ガイドツアー		市民協働事業: パークマネージメント事業	県民共同花壇	ナチュラルガーデンへの参加
振興・地域					観光スポット化	観光スポット化 造園業者の活躍の場

4.5. 緑化フェアレガシーの形成プロセス

6地域へのヒアリング調査を「緑化フェア招致前」

「緑化フェア準備期間」「緑化フェア期間」「緑化フェア開催後」の時間軸に沿って整理したことで、緑化フェアレガシーの形成における2つのプロセスが明らかになった。1つ目は、「緑化フェア招致前」の地域資源の活用や課題解決の手段として緑化フェアを開催していることにより、既存の資源や課題が形を変えて緑化フェアレガシーになるプロセスである。2つ目は、緑化フェアの実施要綱に基づき生み出された「緑化フェア期間」の取り組みが、フェア終了後の働きかけにより緑化フェアレガシーになるプロセスである。

5. 考察

5.1. 緑化フェアレガシーの継続の要因

単年度で終わらない緑化フェアレガシーを継続させる要因として、拠点をベースにした運営組織による継続力が挙げられることが明らかになった。拠点があることにより、運営組織が生まれ、財源、人材や技術といった継続につながる要素も発生する。この拠点をベースにした運営組織の仕組みを構築することにより、「会場」「イベント」「政策・制度」「組織」といったそれぞれの緑化フェアレガシーが関連しながら継続されることが明らかになった。

一方、緑化フェアレガシーとして限られた地域のみでしか確認することができなかった「市民活動」と「地域産業」の継続の要因については、岡山市と鳥取市の事例より共通する1つの知見が得られた。「市民活動」がフェア開催後も積極的に行われている岡山市は、緑化フェア招致前から地域の課題を認識し、緑化フェアを社会実験の場として位置づけ、市民協働事業に取り組んでいた。そのため、緑化フェア期間に事業を引き継ぐ体制がしっかりと組織されていた。

また、鳥取市では「地域産業」である地域特有の自然を生かすために、緑化フェアのテーマとしてナチュラルガーデンを設定し、緑化フェアを通じて地元造園建設業界の技術の向上や活躍の機会の創出を行なった。

以上の事例より、「市民活動」や「地域産業」を緑化フェアレガシーとして継続させていくためには、「緑化フェア招致前」からの計画とその体制の仕組みづくりが重要であるという知見が得られた。

結果と考察を以下の図に示す(図4)。

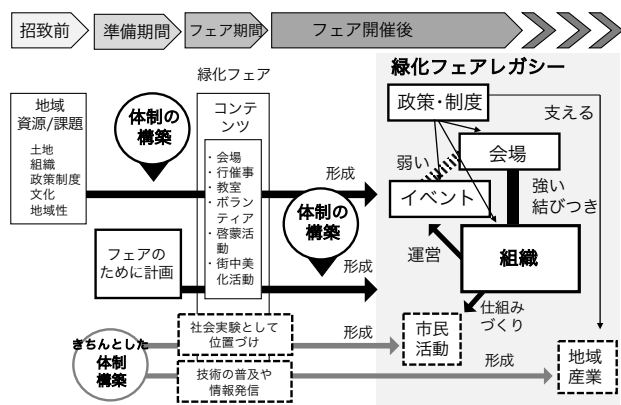


図4 緑化フェアレガシーの項目と形成プロセス

5.2. 人的ネットワークと緑化フェアの利用

緑化フェアは開催時期の近い都市間では、担当者間の

情報交換が積極的におこなわれていることが、今回のヒアリングから明らかになった。そのようなネットワークから、他地区の事例を参照しながら、自分の地域の課題を整理し、重点的に取り組むべき点を見出す機会として、またその解決に向けた実証実験の場として緑化フェアが利用されていたことが明らかになった。

6. まとめと今後の課題

緑化フェアレガシーを「会場」「イベント」「政策・制度」「行政組織」「活動」「地域振興」の項目に分類し、6地域の具体的な緑化フェアレガシーを把握することができた。また、その形成のプロセスは、緑化フェア開催前からの計画の有無は大きく関係なく、継続の要因として、その後の運営組織による継続力が大きく挙げられることが明らかになった。

また、本研究では、調査対象地が6地域の緑化フェア担当者と限定的であった。より正確な緑化フェアレガシーの項目を明らかにするためには調査対象地の拡大や、市民組織や関連組織へのヒアリングを実施する必要があると考えられる。

本研究はJSPS 科研費 17H00901 の助成を受けたものです。

補注

注1) 国土交通省による全国都市緑化フェア検討会(2013)による提言内容より抜粋。

注2) 本調査で外部からそのレガシーの存在を知ることのできた関連イベントがある地域を中心に調査を行なったが、相模原市に関してはヒアリングの結果、現在はイベントが行われていなかったことが明らかになった。

参考文献

- 1) 国土交通省(2011):国都緑環第72号 全国都市緑化フェア開催要綱
- 2) 田代利恵(2012):文化的イベントが地域協働のまちづくりに果たす役割に関する研究-古い町並みを有する地方都市を事例に、龍谷大学大学院政策学研究1, p. 149-168
- 3) 阿部勘一(2013):国民体育大会におけるレガシーと「地方」成城大学経済研究 202, p. 315-359
- 4) 清水正之(1997)「博覧会が公園緑地の形成並びに啓発に及ぼした影響に関する研究」, 東京大学, 博士論文
- 5) Chris Gratton & Holger Preuss (2008). Maximizing Olympic Impacts by Building Up Legacies, *The International Journal of the History of Sport*, p. 1922-1938
- 6) 第30回全国都市緑化フェアとっとりフェア実行委員会(2014),「第30回全国都市緑化とっとりフェア公式記録」

* 首都大学東京 都市環境科学研究科 観光科学域 博士前期課程

**首都大学東京 都市環境科学研究科 観光科学域 教授

***首都大学東京 都市環境科学研究科 観光科学域 助教

* Master's Programs, Dept. of Tourism Science, Tokyo Metropolitan Univ.

** Prof, Dept. of Tourism Science, Tokyo Metropolitan Univ.

** Assis, Prof, Dept. of Tourism Science, Tokyo Metropolitan Univ.